ツンと立つてゐるバルチーデル・ク

へば、ビーチホルンの裏側にポ

の記念と限られたものではないが。 少くない。必ずしも山で失はれた人

ラウゼ小屋がそれだ。小ぢんまりと

側に、彼の生誕百年(一九二二年) 紀念は此の他にもボヴァール小屋の が書かれてゐるのである。コアツの 爲めに、此の小屋が寄進された所以 者であるその偉大な先蹤者の名譽の

を記念して造られた碑がある。

大き

來た、如何にも綺麗な此の小屋は

山に献げた若き生命の紀念として全

支部の所有並に管理に闖してゐる。

く相應しいものだ。



會 岳 Ш 本 H

アルプスの小屋にはそんな小屋が

60

月

#### 和昭 4. 九 年

池

Ħ

小

屋

命名されるらしい。 ら餘り離れてゐない地點に建設され 早くも半歳が過ぎた。遭難者池田 られてゐる。小屋も「池田小屋」と 近く小屋開きの運びに至る筈と報ゼ ことは、當時新聞紙上にも報道され ら山小屋寄進の中出があつたと云ふ 一氏の籔を弔ふ意味で故人の父上か 白馬八方尾根の遺難があつてから 此の新しい小屋は遭難現場か

所屬してゐたジュネーヴのS・A・C の父が寄進したものである。故人の コンスタンチン・トパリの爲めにそ として多望の生涯を終つた植物學者 んで見るからに頑丈な此の小屋は、 も新しい部類に屬し、石で周圍を夢 小屋だ。アルプスの小屋の中では最 ホルン氷河の側に立つてゐるトパリ 九二六年秋から開かれたもので、 九二四年の八月、二十六歳を一期 池田小屋で想ひ出すのは、ビース

行かないのだ。 な、なごやかな氣持を持たない譯に 見守つてゐて吳れるのだと云ふやら の美しい心が、我々の一夜の眠りを 涯を通じて山を愛したであらら故人

デンに地を選びローゼック氷河の側 特に故人の故郷であるグラウビュン 家を紀念しやらと云ふ企てが始り、 で長逝した時、既に此の高名の登山 來たのも一九二六年のことである。 ツを記念する為めのコアッ小屋が出 一九一八年にコアッが九十六の高齢

記し、ピッツ・ベルニーナの初登攀 と祖國との爲めに献げられた熱情を 頁にコアツの學徳を稱へ、その自然 ヒュツテンブッフを開けると最初の ないもので、小屋に備へつけられた に造りも四方を石で関んだ頑丈極り に、此のコアッ小屋が出來たのであ トパリ小屋と同時代のもの丈け

は極めて少いに相違ない。併し、 などでクラウゼなる人を直接知る人 懸けてある。 日頃愛でた遺品二三が、さりげなく 雜囊など此の小屋を寄進した故人の 出來たもので窓の側にはひからびた ルンの登山家クラウゼ氏の遺言で 今時此の小屋に泊る者 生

學者として識られた、ヨハン・コア S・A・Cの長老で、世界的地形

建てられた亡き人の父上の心情を掬 ことを家まない譯には行かない。 の安らかな宿を樂しむことが出來る た若き人の上を想ひ、又此の小屋を むに相應しい氣分に浸り乍ら、一夜

らば一つの喜ばしい革新を齎すこと は疑ふ餘地がない。(松方) 圖を生かして行くことに成功したな で注目に値する。殆んど總ての山小 池田小屋がそれの寄進者の美しい意 かは全く興味ある問題である。 のだが、北アルプスの山小屋の中で 屋が山岳會所屬である瑞西ですらト に伍して出現したことは色々な意味 池田小屋が、どんな空氣を造り出す ついた小屋は一種獨特の存在である パリやクラウゼやコアツの名と結び

込んだベルニーナの山群を一望の中 故人を偲び、紀念する上から云へげ に収めると云つた場所である。併し ロンズを嵌め込んだもので、 な自然石に彼の横額を彫りつけたブ アツは著述や傳記を讀んで忍ぶコア 何といつても小屋に越したものはな いやらだ。小屋に泊り乍ら考へるコ 彼の打

ツに比べて遊に親身なものであり人

と知らざるとを問はず、山で失はれ 小屋に親んだ何人もが、故人を識る 屋が在來の營利專問の小屋とは相違 てゐないが、我々としては、此の小 間的なものであるからである。 した空氣を造り出し、終あつて此の れるかについては我々はまだ詳にし 池田小屋が如何に經營され管理さ

隠する第二回政務調査會においては

尾瀬原發電所計畫に關し

一、尾瀬原發電計畫は雨量が十分で

ないと困るがこれに對する見込み

一、雨量の少ない場合は只見川の水

沿岸の灌漑水その他に支障はない 力を利用せねばならぬがその場合

池田小屋が數多くの營業者の小屋 若し 等の質問に對し 惑すると思ふがこれに對する施設 川に放水する時は下流は非常に迷 尾瀬原發電所の水を一時に利根

開 iù

電計畫が今や電力民有國營案と密接 記事を掲載してゐる。尾瀬ケ原の發 に結びついて登場しつゝあることは 九月十九日の東京各紙は次の如

事實である。計畫の内容については

多分次號に報告出來ると思ふが、兹

には新聞記事をその儘轉載しておく

十八日の民政黨の電力國營問題に

旨遞信省側より答辯があつた。 一、利根川に一時に放水せず別に溜 一、只見川から一時引き入れても他 一、雨量は大正十一年以來東電の統 計によつて十分に自信がある してゐるから危險はない 池を作つて徐々に放水することに から放流するから支障ない

(スクラップ係)

0

#### 力 ル カッ タから根據地まで

# ナンダコツト隊の動

導案内の下に各方面の打合に日を費 立派でない繪葉書一枚三十二錢、映 ッタでは夜はやゝ凉しく快いが物價 前からの奔走の禮を述べた。カルタ 殺切な」タウンエンド夫人を訪問從 名譽書記である「愉快な感じの良い クラブ、イースタン・セクションの 事、日印協會、その他在留邦人の指 後直ちに總領事館員特に野々村副領 發。前者は七月二十日カルカッタ着 及大每の竹節氏は七月 十二 日 神戸 は六月二十四日、堀田、湯淺、濱野 畫館の入場料三圓五十錢(これは誰 の高いには閉口した由。例へば除り し、七月二十九日にはヒマラヤン・ ナンダ・コット登攀隊の先發山縣 で乗換、カツゴーダムについて先づ の日の夜パレイリージャンクション が島々に似てゐる。荷物は一緒に到 一息つく。この地は山麓の村で感じ

邦人から更めて大々的の歡迎を受け 氣で引籠り中。本除到濟と共に在留 てタウンエンド夫人を訪問したが病 られ他は全部無税、再び一同打連れ 料品に對して輸入税に十留比課税せ 領事の斡旋に依つたものである。 て吳れることに決定、勿論これは總 物は大貨物の運賃で客車便の扱をし 館へ到着、其手數料一人當八安、アンナ 八月十日本隊カルカッタ到着、食 荷

く解らぬらしく、自分等と同國のも 土地の人夫は一行がどこの國人かよ 瀬氏と協力して良く働いて吳れる。 物の改裝人夫の選拔で忙がしい二日 名それにダージーリンの豪の者三人 のであるまいかとも考へたらしい。 を費す。ヌルサンは慣れたもので廣 を奪ひ合ふ土地の人共に一吃驚、荷 人に竹節氏廣瀬氏と日本人合せて六 十六日自動車でアルモラ斎、荷物 十九日朝凉しい空氣の中を一行四

得たことを喜びキッド氏の好意を深 二名到着、この評判の良い男を頼み で人夫頭ヌルサン Nursang 他人夫

やつて來る。在印多年に及ぶ此の人 依頼することになつた廣瀬丈吉氏が 員林氏の御世話で通譯及運送監督を 謝した。また在ボンベイ日本山岳會

心配した奥地への旅行許可證も領事 ニングをやつてゐたといふことだ。 の荷物を背負つて近郊の山でトレー は今回の行に加はる爲特に毎日六貫 かに奢つて貰ったらしい)。やがてと

**着せず一日滯在。** 

セクション名譽書記キッド氏の世話 マラヤン・クラブのダージーリン・

> 毛布を携へて出發。これ以後事務上 の難儀はなくなつたが何と云つても 五百匁の荷物を背負ひ、給與した古 ンスーンで、水量の増した河を肩

と記された澤か)兩岸は嶮しい氷壁 到着(一哩一吋の地圖にLwanl Gadh に沿つて上り約一萬四千呎の地點に 出てマルトリでゴリ河に合流する澤

ライベット ネ ンダコット ガンガ(河)ニ注グモノ 図上示シタ河ハ皆 コット カシャム合 ムンシアリ ハゲシュアル 耳# カトラがらく 界

十三日夜ホウラー驛から栗車、次

模なので少々威壓を感じたらしい。 がら十五日の待步旅行。地形が大規 車で渉つたり、猿に出くはしたり、 蛭につかれたり、相當な目に會ひな 七月二日ナンダ・コットから東へ

地のもの六十四人(外に印度警官

一人同行した筈)、それが銘々八貫

信による。(立教大學山岳部) らしく空が高くなつて行くさらであ である。天氣も徐に良くなつて行く ――登攀隊よりの書翰その他通

處でポーターを約五十人ひきつれて

大して故障もなく、二三日中に此

いよ~~ナンダ・コットを目指して

### IJ

## カツゴーダムから

二、四、九、十一、十二、十四、十 ツゴーダムに着き一泊、十六日アル でやつと何んとかなりさらです て來ます。會長外御一同様のおかげ 九同じです。これから大いに頑張つ る。數をかぞへるのも似てゐます。 は日本人に似てゐる。言葉も似てゐ モラにむかひます。ダージリン人夫 々に大歡迎をされました。十五日カ 前略カルカッタにて日本人會の方 正男

### アルモラから

他の二人も元氣な若者で、 を得て一同喜んでゐます。 物で、とてもきびんして優秀だ。 ストのチーフ・サーダーをやつた代 **夫三名と十三日後、十五日アルモラ** カンチェンに三回、今年のエヴェレ に到着しました。 カルカッタ着、既着のダージリン人 ダージリン人夫の名は 御蔭様で私達一行は元氣八月十日 でヌルサンはエヴェレストに五回 マプチ・トプガイ(ブーチア) アンェリン(シェルパ) ヌルサン (シェルバ) ーサーダー 色々御世話様になりました。

して一同勇躍致しております。 キャンプ迄案外樂に入れさらな氣が 奥地の方へ向ふ豫定です。 八月十六日 立教大學遠征隊 ベース・

## ムンシャリーから

八月十九日我々五人、通譯一人、

苦力六十五人、合計七十四人の大部 ゴリ・ガンガの奥の岩と雪の峰を遠 リの雪峰は見ることが出來ませんが に入り、パンチチュリ四麓の平和な 旅を續けて、 超え、谷を渡つて八十哩、八日間の 除がアルモラを出發してから、山を 巡査部長一名、同サーバント二名、 明けになるので好天氣にてベース・ で、今日一日此のバンガローに滯在 途中物資を得ることが出來ませんの く望むことが出來ます。マルトリ迄 した。餘り低い處なのでパンチチュ ーに一行は元氣に萧くことが出來ま ムンシャリー村のダック・バンガロ キャンプに入り、 りました。もうそろく、モンスーン と、一同張りきつて居ります。 ース・キャンプに入ることが出來る して、いろく一の準備をして居りま 明日から四、五日で、 ルモラからずーつと天氣悪く困 昨日ゴリ・ガンガの谷 登攀出來るやら、 我々はべ ーコートのやらなものと着てゐて、 山でせう。あと二泊でマルトリに行 をいたゞく山を見ますが、名もない さらです。時々晴間をすかして白雪 なかく、立派でした。チベット人だ

ナンダ・コット登攀隊

同神に祈つて居ります。

八月二十七日

達も大した失敗もなくムンシャ (私信から)

> リーに來ました。天氣の良かつたの く弱つたです。人夫も六十五人の中 けで、あとはずつと雨ばかりで、 はサマの峠からテジャムに來る時だ 三名病人になり、その村々で補充し 仝

ので何も見ずに來てしまひました。 見えたさらですが、私は早く降りた ました。雨の晴間にバンチチュリが 群に合ひました。隨分大きいのが居 部落で土地も良く耕してゐます。ギ してムンシャリーに下る途中猿の大 ルガオンからの峠、カラムニ峠を越 ました。ムンシャリーは廣い開けた こゝの村長見たいな奴は、ブレザ t,

よくやつてくれます。 つて來た。エスコートとヒンドスタ ニーで話をする。 迫 加。ヒンドスタニーがうまくな チベット語も少々

唱つた歌でブルースは土人に人気が あつたさらである。 ンガローの庭で踊をするさらである に行つた時にダージリンの人夫達が 次の歌はブルースがエヴェレスト 今日アルモラの人夫達がこゝのパ

(ポテートのフライ)・ジナン・ブル ヌゴー(士地の人)・アルゲタルカリ 「カルサン(土地の名)・ガイ・シ

スをジャパサープになほして唱つた ユメル・サルカリー」 ダージリン人夫がジナン・ブルー

ス・ヒマルミイ・ジャンダー・ジ

濱野

日交通機關の終點アルモラを發しモ なかつた為、延引を重ね失禮のみ致 ンスウン期の事とて若干苦勞をした して居りました一行四名は八月十九 が、今迄の處適當な時機を見出し得 時々御便申上げるべきではあります ました當部ヒマラヤ踏査隊に就ては **豫**てから一方ならぬ御配慮を煩し 0 0 0

きます。エスコートは我々のサーバ ント見たいで食糧から何から何まで 居ります私共は一先づ安堵した様な 進捗致しましたので、留守を預つて わけであり、また御便を差上げるの あります。計畫がこの程度迄滯なく の心持をそゝり立てられて居る由で 天候も恢復に向ひ愈々これから山へ 過し、幸に健康狀態も良好で、折柄

民人夫約七十人操縱の難關も無事通 方約十三哩の根據幕營地に到斎、土 を後にして、九月二日マルトリ村西 様でありますが、百二十數哩の道程

通りに行動し得たのは實に在印本邦 ッタ到着以來今に至る迄、大體豫定 す。思へば去る八月十日一行カルカ ので皆様にも此趣御知らせ申上げま に丁度良い機會であると思ひました

らぬことを感じます。此機を利用し 迄もなく、各位の御高配の賜に外な ブ等の御援助に負ふものなるは申す 官民、印度官廳、ヒマラヤン・クラ

> 只管に願ひ上げます。 九月十七日 立数大學友會山岳部長 辻

# 正男

忘却された山岳人

俱樂部の會長の役をつとめ「雜誌ア

り一八六五年から八年までアルプス を訪れてゐる。彼は山岳の大家とな

て居る。

掛けたが、さてその序文を一讀して のである。こゝにその序文中から拔 登山經歴がこの書の譯者によつて實 てはかなり重要であつたと見られる 驚いた。原著者スティーヴンにとつ 筆者も一本を購ふつもりで本屋へ出 スティーヴンの文名に惹付けられて 文學と社會」と題されて上梓された つて飜譯され、「十八世紀に於ける英 今夏、この書が岡本圭次郎氏によ

Щ 征服として成し遂げた登山の中には ての彼は更に有名になつた。彼が新 五哩レイスに優勝した。山岳家とし ム、チナル・ロスホーンなど多くの モン・プラン、ユングフラウ、 リスカ としてゞあつた。一八六〇年大學の 『彼が始めて名を擧げたのは運動家 々があつた。これらの登山につい

て御禮を申上げ更に今後の御摩援を 莊 ての著書もある。

年最初の結婚以後彼の登山活動は次 第に衰へたがそれでも四度スウィス 生涯その一員であつた。一八六七 一八五八年アルプス俱樂部員とな

つであり、有名な講演として知られ 多いスティーヴンの文學的業蹟の一 ことは今更云ふ迄もない。これは數 ures, 1904) なる有名な著書のある Eighteenth Century (Ford Lect-Literature and Society in レズリー・スティーヴンにEnglish the

書きして見ると、

プラン、ユングフラウ、リスカム、

遂げた登山の中には」として「モン

があつた。」と述べられて居るのが チナル・ロスホーンなど多くの山 先づ第一に、「彼が新征服として成し ど、念のために一言いはせて貰ふと 作り上げたと言はれてゐる。』 簡勁で美しいものとして新しい型

山の仲間ではこの拔書きだけで結

お祭しがつくこと」思ふけれ

その獨特の美によつて彼 を惹 よつて得たと言はれてゐる。山は又 した。彼の親友の多くはこの登山に ていなく、友情を得る動機として愛 彼はこの登山を單なるスポーツとし ルプス」を編輯する事四年に及んだ。

付 H

た。彼のこの方面の著書は色彩あり

老

てこれをもつと親切に解して新登路 でもない誤解が生じる。これをたゞ 時ちよつと珍しい時代物なのでとん は正しく、サン・ジェルヴェより、 による初登頂と見れば、モン・プラン 初登攀と解すると、アルプス登山史 ひつくり返る騒ぎになる。と云つ 新征服といふのは愉快な言葉で今

リスカムは西側より、

ユングフラウ

プホルン、オーベラールホルン、モ リムピシホルン、ブリュムリスアル しいアルプス登攀史中の大葉蹟シュ 々可笑しい上に、それではあの輝か り酷い!)が含まれて居るのでは、少 中に正眞正銘の初登攀であるチナー はロートタールから、すべてスティ ーなどの初登攀はどうして与れるの ンテ・ディスグラチア、モン・マレ レックホルンを初めビーチホルン、 ル・ロートホルン(ロスホーンもかた 一應正しい記述と見られるが、 ーヴンが一番楽りをやつて居るから その

**加しなくなつて居る。近頃珍しい、** 究家も居て、今では曖昧な記述は通 恐しく精力的で級密な學者 も居 この方面でもクーリッヂなぞといふ なぞ問題でないと一蹴されやうが、 ひの熟語は既に登山史の世界からは し、その外外國には綺羅星の如く研 「新征服」などへいふ冒険小説まが 譯者は英文學專攻であつて登山史 だと云ひたくなる。

たいために態々筆をとつたのではな

い。問題は別の處にある。

に過ぎず、筆者はそれだけを訂正し

以上は序文に見られる誤りの二三

足を洗つて居る。「アルプス俱樂部」

だの「雑誌アルプス」なども變なもの

は 派に通つてゐる 「アルパイン・ジャー ナル」 で立

代を見てもスティーヴンの會長時代 ともないわけだ。 ter",第一卷をひろげて見れば何のこ で、鼻につくが、實は之位の訂正は 八年迄である。といふとさも街學的 は一八六五年でなく一八六六年から マム氏編纂の "Alpine C!ub Regis-楊足取りのつもりではないが、 年

に大きな侮辱を與へて居るものだ。 述は原著者の生活に對しても無理解 のゝ價値評價を知らない點で登山界 の譏を免れまいし、次に登山そのも 第一にこの序文の如き無責任な記

つの飜譯とは云へ、それを邦語に移 登りとはそれ程シーリアスなものだ 不可分の關係を知り、あはよくば山 たならば、スティーヴンと山登りの ない。若し譯者にしてその態度に出 した上でとりかゝるべきは云ふ迄も すためには原作者の生活態度を熟知 に魂を打込んだことに對しては、 ないらしいが、原著者がそれ程まで 身そう理解した上で書いたものでは 愛した」といふ一節もどうも譯者自 してゞなく、友情を得る動機として つたか位は解つたかも知れない。 「彼はこの登山を單なるスポーツと スティーヴンの數多い著作中の一

ららっ

リー・スティーヴン」について見て 吉君の遺著「先蹤者」の一章「レズ のを彼は更に、メイトランド教授の A. C. Register 一巻で事足りるも つて居た。登山脈だけならば前掲の 般について言及するだけの用意を持 際して、あれだけその文學的業績全 してのスティーヴンの業蹟を語るに 欲しい。わが大島亮吉君は登山家と をも讀んだ上で筆をとつて居る。 "The Life of Leslie Stephen" | 我田引水ではないが試みに大鳥亮

rope"一卷を熟讀玩味した後にステ 更に名著 "The Playground of Eu-對して、 A. C Register によつて な原著者の姿をそこに見出したこと と思ふ。さらしたら譯者が更に大き ィーヴンについて語つて欲しかつた 正確なスティーヴンの足跡をたどり も済んだ筈である。 いがしろにする非禮を敢てしないで 氏を初め敷々の山岳史家の努力をな たことも間違ひない。同時に故マム は間違ひないし、一層の尊敬を感じ 從つて筆者はせめて譯者岡本氏に (島田)

## ◇市史稿三十年◇

少し深く調べることが必要であつた 年の健闘の祈る次第である。 會の生涯に匹敵する。 木暮さんに百 十餘年に比べては短いが、日本山岳 を受飢された。市史三十年は登山四 十月一日の自治記念日に市の有功賞 京市史編纂事業に對する功勞により 木暮會長は前後約三十年に亘る東

つたことは時宜に適つたよき思ひ

きであつたと云ふべきであらう。

風ひて譯せば「英國山岳會誌」と云 「雑誌アルプス」は正に噴飯ものだ。

ふべきであらう。尤もわが山岳界で

俱樂部なぞといふのは一寸見當らな 日本山岳會はあつても日本アルプス

い。「アルパイン・ジャーナル」を、

として通用して居る。

日本にもわが

通るし、日本語にしても英國山岳倉 岳界にその儘アルパイン・クラブで だ。アルバイン・クラブは世界の山

#### 日本北アルプス案内 ◇新 刊 紹 介令

昭和十一年六月 四六半截判、 第一書房刊 定價一圓 冠松灰郎著 五七七頁

内、紹介に盡くした著者は、「高瀬谷」 て北アルプスの精確且つ妥當なる案 うといふのが本書の...つの目的で ある。この缺點を全面的に補正しや の内に舊くなつてしまつてゐるので 通機關の發達等によつて、たちまち る新登路の開拓、山小屋の桁設、 精密なものであつたが、近年に於け ら數册の案内書は、記述は如何にも を以つて一應それを完結した。それ 「立山群峯」以來數册を續刊され 交 あ

略したくない思ひ出の紀行ばかりで は て、案内を得、行程を作り出さらとい あるが、紀行文を讃んでそれによつ 切な案内書なのである。從つて著書 なつた。要するに今日必要なのは親 所謂紀行文の案内記的意味はらすく 日本アルプスでは必要はなくなり、 ふのは、或る特殊の場合を除いては も一つは、今迄に發行された數册 何れも著者自身から見れば、省

> 小屋を一覽表として示し、それから 懇切丁寧な案内であらうともいふ事 評の限りではない。恐らく精確且つ 方面に入る機會の少い自分などの批 意味、其案内の適否などは近來、 案内に言及してあるのも嬉しい。 のである。それは卷末に添へられて 表に基いて簡單な説明を加へてゐる 日程表を掲げ、然る後に、 關係地圖、交通、根據地、 面に分ち、各山群については、先づ る。著者は、日本アルプスを各種方 は、本書の説明振りでさら考へられ は主として夏山であるが、積雪期 難い案内である。書中説明される所 初心者にも久しぶりの再訪者にも得 ゐる登山の注意、附圖四枚と相俟て 案内記の登山に於ける實際的 案內、山 この日 此

は言ふ迄もない。 力と骨折と經驗との結晶であること のゝ、しかし、著者の永年に亘る努 岳界の現狀から見れば當然であるも のは、一面、全面的に發展した我山

かゝる用意周到な案内書が生れた

本アルプスの親切な案内書の筆をと の型を離れて案内に重點をおいた日 が、知行と案内の雜居してゐる從來 0 は、 南氏の「日本アルプス、附登山案内」 うちにあつて、新しい而かも精確な くは甚だ無責任のものが多く、 幾十種あるか知れない。俳しこの多 以來、日本アルプスに開する案内書 人々には忘れ難いものである。 として、その頃漸く山に入り出した は、日本アルプスの綜合的な案内書 本書の如き案内書の出た事は父我登 大正五年に初めて出た、矢澤、河野 片々たる小册子まで含めたら、 それ その

**望ましいことであらう。(黒田孝雄)** クーリツヂのアルパイン・ガイドの との案内書が年々に改訂せられて、 この案内書が年々に改訂せられて、

### 單獨行

菊 判 二一二頁加藤文太郎遺稿集

頒價 一圓五十錢 區上橋通二丁日津田方) 區上橋通二丁日津田方)

十一年一月、槍北鎌尾根で遭難したR・C・Cの加藤氏の遺稿集である。特異な單獨行主義と果敢な實踐とによつて汎く元の名を知られた同民だけに、この遺稿集 草に故人を一氏だけに、この遺稿集 草に故人を一何向を代表する文献として認められるべきものであらう。

渡つて故人を語つて居る。 序文には藤木九三氏が「生れなが

> らう。 放人の人となりを偲ばせるものであ 素朴な記述に過ぎないが、かへつて 変算は決して巧みではなくむしろ

らしいものである。

渋稿集としては割合に短時日の中 であつたらう。

The American Alpine Journal 1936 Vol 2. No 4.

巻頭のユーコン探験隊報告、ウットのマウント・スチール登攀等いづれもアルパイン・ジャーナル二五二れたものである。その他登攀記にはれたものである。その他登攀記にはまウギニアのアルバート・エドロード率(三、九八〇米)、アフリカのキド率(三、九八〇米)、アフリカのキド本(三、九八〇米)、アフリカのキがテイ山稜よりのレイニア、等がある。

を再認識させられた。しかしこの調を再認識させられた。しかしこの調を明さんの寫真が並んで掲げられてお母さんの寫真が並んで掲げられてお母さんの寫真が並んで掲げられてお母さんの寫真が並んで掲げられてお母さんの寫真ががある。

できた、大変の人の活躍に押されてその名を知られて居ない米人登山家にするには役立つだらら。密にするには役立つだらら。

0

ウォディントン山群の他には、お部類にはとてもはいるまい」と。

The Canadian Alpine Journal 1934—1935. Vol 業蹟の考證を併載して居る。

ディ夫人が書いて居る。 ディントン地方の氷河についてムン 等の文が掲載され、科學欄にはウォ オディントン果して登られるか?」 月號にしろ、いづれもこの山につい ヴァード・マウンテニアリングの六 ラ・クラブのレオナード氏による「ウ ド山岳會の登攀について、又はシェ 報にも一九三五年七月のハーヴァー さいて居るのでも知られる。この年 て、 この山群が興味の中心となつて居る レッティン(二月號)にしろ、ハー らしいことはシエラ・クラブ・ブュ らう。カナダのみならず米大陸では て居るのはウォディントン山群であ カナダ山岳倉年報で一番注目され 又その遠征について多くの頁を

こりとて『御婦人向き日歸り登山』クラブブュレッティンに・B・ロピクラブブュレッティンに・B・ロピがいがはつきり斷言して居る。 「果して登られるか?」といふ程

ンガ・パルパット遭難記の紹介と寫にやカークウッド氏の「日本の登山」はやカークウッド氏の「日本の登山」によれてイン、ウェストンから「一夏三萬人が上高地を訪れる」現代までを僅三頁半のなかに盛つたのだかでを僅三頁半のなかに盛つたのだから、云々する程度のものではない。日本山 岳會 の名も 二ケ所 程出て來日本山 岳會 の名も 二ケ所 程出て來る。

Roman Alpine Routes Walter Woodburn Hyde 24×15: pp. XVi + 248. Philadelphia. 1955

確で仲々得難いものである。 の峠の各論に及んでゐる。附屬も明 東部各アルプス別に見たローマ時代 プスの一般論に始り、西部、中部、 時代並にその後の時代に於けるアル つてゐることなども此の書の性質を は、矢張り金に代へ難いものであら プスの歴史に關心を持つ人にとつて シーィールドの研究に親しみ、アル のがある。併しクーリッヂやフレッ 説明するに役立だつ。内容はローマ 十圓と聞いては、漫ろに瞠若たるも されたもので假綴乍ら、邦價にして ソサエティーの研究論文として發表 アメリカン・フィロゾフィカル・ 卷末の索引だけで三十八頁に互

(圖書係)

ドイツがナンガ・パルパットを水

## ◇會員通信◇

### 早月尾根

申し候。 且つ又美しき雲海を眺め愉快に思 たのみなりしも、その間眺望宜しく 候が、旅中一日半程の晴天に恵まれ 宿り本道を下り稱名瀧を見、藤橋よ 出かけられず候へ共、八月廿二日よ り千垣に出で、卅日朝無事歸京致し みにて断念、別山立山を經て室堂に られほんの廊下を一町程下りたるの 劔澤に入らんとせしも、天候に妨げ 剱登行、尾根を下り剱小屋、これから 行程にてバンバシゴー早月尾根より り別宮氏と同行一昨年と殆んど同じ 存上候、小生雜務に逐はれ思ふ儘に 汰勝ちにして失禮仕り候、今夏も父 々諸兄益々御活躍の事と拜察大慶に 拜啓其後は心ならずも全く御無 岩永信雄

### 印度から

八月二十三日カルカッタに着きました。當地に來て日本人の方々が立した。當地に來て日本人の方々が立め、變なものであることを知りました。歐洲からどし (一山登りにやつて來るのに日本からは來てゐないといふもの足りない氣持が、あつた時なので一つしつかりやつて異れ、出なので一つしつかりやつて異れ、出なので一つしつかりやつて異れ、出なので一つしつかりやつて異れ、出なので一つしつかりやつといふわけ

チェンガ附近を歩いてゐるのですが とのことです。 とれはトレーニングのつもりらしい やります。 例のパウアーが今カン

八月の第三土曜のことです。

Œ 4

のは此處の森林です。此處では精進

八月廿八日 カルカッタにて 愿

#### ٨ + 里

残つてゐました。 した。流石東北の山、雪はまだ澤山 中で戻つた飯豐に引張られて登りま 方がよい位です。今度は六年前に途 歩き廻つてゐます。今月は山にゐる の夏は暇なので一人でこそく

えました。 が想像出來る樣な氣がします。降り 下るともない、細い踏跡がいつ迄も した時は實によい氣持でした。 てから川で水を浴び、河原で午睡を なりし頃此の道を急いだ旅人の面影 暗い感じがします。 その昔峠路華か ~ 續いてゐる此の峠越は何となく 歸りに「八十里越」に廻り今日越 八月十八日 まだもら一度富士へ行く心算です 荒れ果てた上るともなく 櫻井 信雄

### 中

大臣と云つた連中なのです。 出來ない。謂はゞ國策氾濫下の國務 週間も十日も東京から離れることの 氣味の、併し、さらばと云つて、一 も東京の暑さに多少あてられて逆上 した。同行は槇、三田、田口、 餘り暑いので富士山に行つて見ま 何れ

> すぎの汽車に乗込んで吉田に行き、 出立ちばかりです。 心坦懷に、その粹を蒐めたといふ、 を問はず見榮と外聞とを構はず、虚 たり、可成り燕雑な、併し洋の東西 も降られてもといふので小脇にカン 繰出したのは五時半頃、照らされて 例の如く刑部さんで仕度を整へ、早 を出したり、背負子に蓙がついてゐ カン帽を抱えたり洋傘が背嚢から首 一口に謂へば最新式の航空母離式の い夕食をして西瓜を背負つて勇しく

柳太郎など、云ふ人々が此處を訪れ になりました。小屋の池谷君はつい 何をしてるんだらうといふやうな気 があるのに今時日本中の人間は一體 閑としてゐるのです。こんな好い所 た為めかさしもの馬返しもひつそり 氣甚だ爽快、然も御山も盛りを過ぎ 間は見當がいゝと思ひました。 本物でも、國務大臣を務めた程の人 たといふやうな話をしてゐましたが から歸りがけには案外ケーブル架設 兩日前、民政黨の町田總裁や永井 行は此處から又下へ降つたのです 馬返しまで來ると全く別天地で心 尤も

せん。 五合の邊りでは眞暗になりました

れをだし拔く望みもないと安心して

賛成論でもやつてゐたのかも知れま

が、急ぐことはなし、有難いことに でした。八月半なので流石に石楠花 は七月の雑沓もなし、至極長閑に登 は過ぎてゐましたが何時來てもいゝ つて、小御嶽山に着いたのは九時頃

> 望もよく、南から北アルプスにかけ の日本一の御中道を歩きました。 あるので、至極安らかに漫然と、

眺 此

ての眺めも申分ないといふ絶好の日

ました。大澤で飲んだ「御正體」が

俄然三田君の御腹が謀叛し出し

威力を發揮したので、

資永山の火口

和です。

うな次第ですが、兎もあれケーブル 口の三合まで來てゐる自動車が遠か ととでした。 考へると少からず憂鬱な思ひがした 搦手から自動車隊が襲撃するのかと 問題が漸く落着したと思ふ先から、 たので一先づは胸をなで下ろしたや たら常分自動車は三合止りだとあつ に歸つてから當局の意向を聞いて見 れて、愕然としました。あとで東京 らず小御嶽までのびる筈だと聞かさ

たのです。 弄んで、一寸天狗の中間入りをした とうくしその鉞には手も觸れなかつ とのことです。尤も當人は自重して 三田君はその晩夢で天狗と面會した やらな気分になりましたが、果して 御社の庭で百貫と稱する鐵の鉞を

田口君のニューマン・ゴディアでは 見れば書いてあるし、寫真にしても を讀んで、御小道にかゝりました。 概のことは武田さんの「富士山」を 植物の名前も詳しくないし、殊に大 機械と腕とがとんちんかんで到底あ **烈朝は御來光を拜んで、こんな句** 百貫の斧を持上げ汗も出ず 小御嶽の夢は天狗と砂遊び 空澄んで一萬尺の晝寢哉 幸夫 一郎 三郎

> ら見物人が居た方が派手でいゝと、 勸めて見ましたが、三田君は折角な 處でカンく、朝を投げてはどうかと たが、平素の心掛がい」のでせら、 云ふやらな議論を鬩はしたりしまし を吞んだら酔ふであらうかどうかと あの石の墜ちて來る澤の眞中で、 のを聞き乍ら、大澤を越しました。 となく冬となく、此の富士の西側に 闘もあたらず皆無事に難場を渡りま を想ひ、カラくしと中天に石の鳴る 執心し、精進してゐる先輩友人の上 と乍ら「御肉」や「御正體」を求め夏 した。三田君に一生の想ひ出に、此 九時過ぎ大澤に萧いて何時ものこ 酒

泡を吹かされました。併し、 とうく、聞きませんでした。 りました。 景觀が限を樂しませるのに充分であ 側とはがらりと違つた周圍の森林の 大澤からの上り四百米には大いに 御庭の

く時には田口君のやらな力持で親切 瓜を食べました。山に西瓜を持て行 こをし乍ら、田口君が擔ぎ上げた西 來て、頂上の邊りに雷鳴さへして來 五合を廻つた頃から空が暗くなつて 御尻を乾してゐましたが、大宮口の ども一通り食べるものは食べた上で 頻に腹具合を氣にしてゐた三田君な な人と同行するのがいゝやうです。 此處で蓙を敷いて裸になつて日向ぼ 鬼ケ澤に來た頃はもう午すぎで、

> 全く、 白くないと云ふ説なのです。 角放ふつても眺望が利かないから面 てしまひました。卷いて來る霧の中 大澤のうどんや、何か根こそぎ出し 分けの御先祖様の偉業を偲ぶ一端と も背負つてあれを登れば、富士山草 ものと思ひます。空腹に西瓜の四つ に親しむ程の人は一度は經驗すべき から、火口壁の鞍部までの三百米は さらと云ひません。霧があつては折 したが、カンく、帽だけは断然手雕 く氏の姿は涙ぐましいものでありま を例のカン~「帽を片手に稍然と步 に下る途中から猛烈な下痢でやられ もなららと考へられます。 御中道一の代物でせら富士山 火口底

ました。 浴びて、カンカン諸共汽車で歸京し 時過太郎坊に萧き、御殿場で一風呂 に奔弄されて弱つてゐましたが、 **逆おとし、三田君はまだ「御正體」** 御殿場口に出るとあとは砂走り 松方三郎 五

#### 二高淸溪小屋

九月廿七日落成祝質會を開催致し る九月十三日無事引受を了し、 に恵まれて今般工事の完成を見、 ケ月にわたりましたが、幸にも天候 二高清溪小屋は七月下旬着工以來三 各位の熱のある御後援の結晶たる 來る 去

#### 九月十八日

= 高 高 14 :4 岳 孟

60 - 7

7

新入會員詮衡



地學雜誌

九月號

東京地學協會

## 九月定例理事會報告

務

報

出席者 木暮、武田、旗、黑田、 於て開催 一、九月小集會の件今夏中部千鳥を 井、田口、三田、(委任)小島 宮、芙木、逸見、鳥田、松方、 旅行せる會員岡田喜一氏に依頼決 九月十日午後六時半本會事務所に 別 櫻

一、辻村家寄附金の件

中村清太郎氏作『針木の雪溪』を 案を實行する一方、內若干の金額 を割き山岳畫協會第一回展出品の

一、穗高小屋改築の件

一、關西支部の報告 阜縣廳へ通知。因つて本問題は之 を以て一段落とす。

購入會室へ保存に決定。 辻村家より「スウイス日記」印税 の寄贈あり。就いては「辻村文庫」

提出中の本建築設計圖は九日國立 公園課の手で改訂を完了直ちに岐

#### Unio Excuraionista de Catalunya Lie Alpen Jun./Aug. 1936 The Mountaineer Sep. 1936 The Geographical Journal Aug. 國立公開 巢林書房 國立公園協會

# 中村氏作「針ノ木の雪溪」

Agost 1933

(九月理事會報告參照) でありますが、これで中村氏の力作 の御好意に負ふ所のものであります も加へられた譯です。これは辻村家 木氏の水彩畫が一枚懸つてゐた人け れました。會員の作品ではこれ迄茨 木の雪溪」が虎の門の讀書室に飾ら 會員中村清太郎氏作の油畫「針ノ

## 第七十四回小集命

も出來ず、現に極く少數の養狐場の は當局の許可なくしては近づくとと 轄の養狐場があつたりして、一般人 ゐる譯だ。而も此の部分は農林省直 から、優に千鳥列島の大半を占めて ウルップ鳥からオンネコタンまでの 昭和十一年九月二十四日 一連の島々が含まれてゐるのである 一、中部千島の旅 一口に中部千島と云ふと簡單だが **會員尚田喜一氏** 於三食堂

> 得たことは大なる喜であつた。 中部千島旅行談を氏の口から聴くを 々の風物に接したのであるが、今又 しい土産話に感嘆し、美しい北の島 小集會での講演で我々は幾度びか珍 てゐる。『山岳』に現れた氏の紀行や る。岡田氏は今日迄既に南千島を訪 であり、それ丈け興味もあるのであ 等の島々は殆んど全く閉された世界 番人以外には定住者もない有様であ れ、遠く北端の鳥々にも足跡を印し る。從つて我々山岳人にとつては之 元來岡田氏の旅行の目的は此の地

のではない。その上に干島名物のブ 頑張つてゐて仲々人をよせつけるも にかゝらうとすると、偃松と熊笹が イハウメ、ガンカウランなどが一面 に唉いてゐる。併し、一度びその山 ルップサウ、イハヒゲ、シコタンサウ で乗出した廣々とした御花畠にはウ 天高く昇つて行く。海岸の波打際ま のきらめくその頂きからは噴煙が中 から遙高く聳える急峻な山岳、殘雪 を中心とした旅行談であつた。沿岸 るが、勿論小集會での講演は山の話 域の淡水藻類の研究にあつたのであ

界をさへぎつてしまふ。ざつとこん な所が、中部千島である。幻燈では してゐる内にガスが襲來して來て說 ムつて限も開けない。而もうろく ユが滅多矢鱈と四方八面から襲ひか 行田 藤田 江口 酒井 木下 柴山登茂次 菊地 伊藤直三郎 高山 金子 恭子 杉原 是能 金 俊助 兵力 英夫 忠一井上 久吉 直男 郎 押田 伊藤 谷本 河原 林 利 篤二 島 田 新一田邊 逸夫 中 村 明弌 鳥山 義郎 長島 泰子 佐田 弘 木村

味つたのであつた。 然の美しさだけを、一晩、思ふ存分 我々は岡田氏の御蔭で中部千島の自 世界への快い憧れを呼び起しこそす 況んや、實際は恐ろしく倦怠であら ければ、偃松の波を漕ぐ必要もなく 的なその山々であつた。ウルップ鳥 恰巧な入江もあつた。併し何と云つ ども出て來た。鯨の養殖が出來相な 狐の生の奴が餌をあさつてゐる所な れ、神經衰弱の心配もない。つまり り越年小屋の生活なども、<br />
寧ろ遠い る分ならばプユに襲はれる心配もな なにしろ幻燈を眺め講演を聞いてゐ の風物は全く素晴しいものであつた や新知島など、音に聞くそれ等の島 餘り高くないのに、見るからに高山 ても、引きつけられたのは、高さが

當日の出席者左の如し。 重備 高頭仁兵衛 洙 笹淵なみ子 吉端 妙子

よくショーウインドウや貴婦人の頸 つたまにとぐろを答いてゐるあの銀 十幾つもぶらさがつてゐる光景や、 一枚何千圓と云ふラツコの毛皮が四 黑田 島田 磯貝 公平 橋本晉七郎 吉田 順子沖鳥 勇 逸見 田邊 飯塚篤之助 福田嘉四郎 真雄 俊 介 岩崎京二郎 主計 新庄 礒貝藤太郎 織吉

村尾 今井田研二郎 中司文夫 松方 光兼 淺原 金二 田口 郎 坂戸 1 勝己 三郎 テル

### **會員有志晚餐館**

された。夏以來顔を合せない連中の 後六時半から池の端、世界別館で催 出たのは十時少し前であった。 た合員もあり、自巳紹介などもあり、 山ばなしは大いに賑ひ、初めて見え 久々の食合なので、牛鍋をかこんで の方は中々盡きず、散會して山下へ 一通り鍋の方を片づけてからも、話 秋の會員有志晩餐會は十月一日午

名滿場拍手裡に決定した。 尚夾會の世話人として左の三氏指 主計

テル

た會報を手にして、一種の感慨を持

四六倍版の、立派な一册の本となつ

たれたことだと思ふ。會報の編輯に

直接間接に關係した者の持つた感じ

角田 中村 逸見 田邊 高頭仁兵衞 戶塚 常日の出席者左の如し。 繁松 吉夫 眞雄 黒田 テル 松方 吉田 小島 磯貝藤太郎 高橋文太郎 久太 武彦磯貝 竹志 孝雄 三田 三郎末光 石原 酒井 績 勇

#### 六 + 號

高橋、

飯塚)

飯塚篤之助

十月に第一號が發行されたのである を發行することになつた。昭和五年 の九月號を以て會報は第六十號

明されてゐる所で、當時の編輯者は て始められたことはその第一號に闡

に現出することである。

層温化し、渾然たる空氣をその裡

會報が會と會員との連絡機關とし

満六歳と云へば、親としても、そろ 先づ五分の一に當る譯だし、人間も として受取られ勝である。併し、そ 日本山岳會の行事の中では、新参者 もう六年經つたかと思ふ程、會報は 六頁の食報を初めて手にしてから、 から、丁度六ケ年になる譯である。 寧ろ當然過ぎることである。 が此の會報に就いて何等かの新發展 碎かなければならない。今玆で我々 れでも食の今日迄の生涯に對しては を希望し企岡するとしても、それは 人人人學する學校の撰擇にでも心を 感に反應し、又報道し來つた。

込まれた會員の数は約七十名の多き 會員に配布した。今日まで合本を申 に達してゐる。合本せられた會員は を作製し、第五十三號の附錄として めて製本出來るやらにと一應總目錄 會報は一號から五十號までを取經

たのである。之を始めた頃の編輯者 たやうなものが、からやつて纏めて は「矢張り始めて好かつた」と云ふ て拂つて來た係りの者達の努力が酬 の苦心や六年間に亙つて何かにつけ 見ると、はつきりしたやらに思はれ しては判らない、會報の値打と云つ 喜びである。一號分や二號分を手に れたやうに思つたのである。 る。會報を通して會員相互の緊帶を 機關として、會報を更らに生かし意 義あらしめることが問題の中心であ

毎月の會務並に會の情勢を會員に報 告することを以て任務とすると書い に果させたいと書いてゐる。此の何 登山界の情勢」の報道をも此の會報 てゐる。又「其折々の山の知らせや 界の問題に就いても食報は可なり敏 最もよい記録なのである。我が山岳 限り會報は此の六年間の會の生活の 何れにしても、日本山岳會に關する 云ふことが、出來るやうに思はれる なくとも相當にその役目を果したと れに就いても曾報は滿足とは謂はれ

考へてゐるものだ。山岳關係の定期 於いては何なす可きこと甚だ多いと 通して會員相互の連絡が幾分なりと 會員の機關としての會報の地位は何 響を與へたことは事實であららが、 刊行物の増加が會報の存在理由に影 **ゐたのであつた。そして此の方面に** も促進されることを希望し企圖して 併し會報編輯者は此の他に會報を

百八十頁のものを毎年會員の机上に とすれば『山岳』並に組んで優に二 物を以てしても奪ふことは出來ない 必ずしも少しとしない。併し問題は 送つてゐる譯なのである。量として 二萬二千字、之を年十一回刊行する 量だけではない。九百の會員の共同 現在の會報は八頁で字數にして約

**强化問頭は來るべき六十一號から** 善の重點は飽く迄も、より一層會員 ゐるのである。(**會報係**) に作り出して見度いなどとも考へて そんなものを常に會報の何れかの頁 點にある。秋の長夜を語り明す爐邊 の心に近きものとしての會報を造る 々實現の途に就く運びであるが、改 一夏に互つての懸案であつた會報

## ◇事務所から

□會費お拂ひ込み未濟の方はなるべ □住所の變更は御通知下さい。 □會員通信は事務室内會報掛宛に願 信も同じく。 ひます。その他の會報關係の通 く早く願ひます。

#### ◇會報投稿規 定

◆原稿は特に御希望なき限り一切返 ◆原稿用紙は十六字詰のこと ◆原稿締切毎月五日 昭和十一年十月 五 日發行 昭和十一年九月三十日印刷 編輯係に御委せ下さい。 却致しません。原稿の取捨は會報 發行

P 抵賴棄印刷者 下 刷 所 多 k リ リ 東京市小石川區戸崎町一三東京市小石川區戸崎町一三 東京 雄 北村 東京市小石川區戸崎町一三 郎 北村 カ 三 郎 **庆**告一手取扱 京市芝岡军平町一(不二屋ビル)東京市芝岡军平町一(不二屋ビル) 電話•四尔•六五四条 電話•芝•一六四九番

### 0

0

# 山岳圖書展覽會目錄別册

0 上並 製製 五十錢 (送料) 0

定價

## 「山岳」合本用表紙

二、背、山岳第何年西曆を押す。 六 三、ピラは兩面に倉草を押す。 雑誌を本會へ送付される場合製 前後見返し茨木畫伯筆。 上質パツクラム(灰青色) 場合、五十錢(送料本會負擔) 一年分合本用表紙のみを所要の 本料共一圓(返送料本會負擔)

0

## 「會報」綴込用表紙

ピラは濃緑色レザー、會章押捺

二、背は濃紺色クロース。 代金四十錢(送料本會負擔) て御巾越下さい。 御入用の方は振替又は小爲替に

#### 報」合 本

一、一號より五十號までの合本表紙

三、代金一圓(製本料、送料共) 二、體裁會報綴込用表紙に準ず。

#### ٥

# 振替口座東京四八二九番



